

【表現学関連分野の研究動向】

日本文学研究(近代)

吉田 遼人

漠然と理解したつもりになっていた言葉や表現、ひいては作品／テキストが、それまでとは異なる相貌を呈しはじめること。対象と丹念に向き合った読解を通じ、そのような事態に気づかせてくれる論考に接すると、いつでも身の引き締まる思いがする。

齋藤樹里「太宰治「おさん」論——小春の欠如と見立てられた「おさん」——」(『日本文学』第71巻第6号、2022年6月)は、典拠となる「心中天網島」との比較をとおして、自身をおさんに「見立て」ようとする「私」の語りの指向性、そしてその理由を問うている。みずからを語る／騙る一人称表現に対する細心の考察から浮き彫りにされるのは、「夫」の心中に対して主体的でありたい「私」の姿であった。小説末尾における「夫」への「愛想尽かし」に注意が喚起されるとき、強く、たくましい女性と読まれてきた「私」の人物像が大きく変容する。こうした解釈の更新が、典拠および関連文献の調査に裏打ちされていたことも言い添えておきたい。

木下幸太「書かされる「私」たち——福永武彦『草の花』論——」(『文学・語学』第235号、2022年8月)は、ひとえに恋愛物語などと受容してしまうかぎりでは把握できないテキストの構造を、「登場人物たちによって反復される主題的な行為」、すなわち「死者を〈記憶する＝書く〉行為」への着眼をとおして、鮮やかに照らし出してみせた。『草の花』を生者と死者とが互いに影響し合いながら「共生してゆく物語」と捉え直すことにより、自律的な個人像には収まりえない「私」の存在様態についても論及する。精読と考察の帰結として「書かされる「私」たち」(傍点原文)と意義づけられる特徴的な主体のありようは、ことさら興味深く映る。

一篇の文学作品を緻密に読み解く試みがなされる傍らで、文学史あるいは表現史もまた、俎上に載せられている。

『物語の近代』(岩波書店、2020年)の兵藤裕己と『明治の表象空間』(新潮社、2014年)の松浦寿輝とによる対談「近代小説の文体、そして文学の可能性」(『図書』第877号、2022年1月)では、「ものがたり(物語)」という行為の相、「言文一致の功罪」をめぐる対話をとおして、近代文学の歴史の再考が促される。このとき糸口のひとつとして、泉鏡花の文体表現が見据えられていることは重く受けとめたい。

『日本近代文学』第106集(2022年5月)では、特集《文学史はどこから来て、どこへ行くのか》が組まれた。6本の論考が並ぶなか、わたし自身にとっては、「作者」主体を前提とするのではなく「作者の死」や「間テキスト」を前提にした歴史叙述の可能性を提示する永井聖剛「文学史の〈穴〉——主体と非主体とのあいだ——」が知的刺激に満ちていた。作中人物を惹きつける〈穴〉の機能を、中動態という概念を鍵としながら検討し、自由間接話法の問題をめぐる考察につなげてゆく。そのような視角のもとに、斬新な「表現・文体史」の輪郭が描き出されたためである。

以上、遺漏が多いが、2022年の研究動向の概観に代えたい。(愛知学院大学)